

## 高校生

## との対話

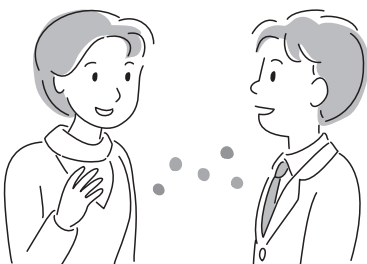
授業の工夫を  
するようになった理由

国語科担当として、さまざまな学年の授業を担当してきました。学校現場にはさまざまな領域の仕事がありますが、「生徒と直接かかわる場としての授業」を、自分の仕事の「根っこ」としてとらえ、工夫し続けたいと思っています。

実は、そう考えるようになったのには、ちよつとしたきっかけがあります。

## 保健室の「和みワールド」

新人時代、校務分掌の関係で、保健室

「G先生の授業を  
見るといいよ」

私立中学校高等学校教諭

伊藤 久仁子

いとう くにかこ 勤務する中高一貫校で文章表現力育成に取り組んでいます。モットーは「転んで学ぶ」。ストレス解消は書読めぐり。学校心理士。

居心地がよく、空き時間があればちよつと顔を出して、S先生の淹れてくれたお茶をいただきながらおしゃべりをするのが日々の楽しみでした。

もう一〇年以上前に定年退職されましたが、S先生の生徒対応が今でも私のお手本です。

## 生徒の悩みあれこれ

S先生は座談の名手とでもいいでしょうが、その場にいる生徒たちが初対面同士であっても、話の輪をつくるのが上手でした。もちろん一対一で話すべき相談は尊重していましたが、軽い悩みや単なる愚痴であれば、その場にいる人たちがあれこれ話すだけでもかなり気分転換になるものです。

私もよくそういう場に居合わせ、生徒の話の聞くともなく聞いていました。すると、生徒の悩みは友人関係や親子関係ばかりではなく、「授業に関する悩み」がかなりの割合を占めることに気づきました。

のベテラン養護教諭S先生と一緒に仕事を  
する機会がありました。  
S先生は、気さくでいつもニコニコと  
笑顔を絶やしません。そのお人柄のせい  
か、保健室は生徒たちの憩いの場になっ  
ていました。

生徒たちばかりでなく、私にとつても

「授業がづらい」生徒たち

生徒の言い分をすべて鵜呑みにするわけではありませんが、授業の進度が速すぎたり、課題が多すぎたり、説明がわからないのに質問ができなかったり、板書の字が乱雑だったり、勉強の仕方がわからなくて頑張ってもついていくのが難しかったり、実習のグループが苦手なメンバーばかりで困っていたりと、不平不満がまあ出てくること出てくること。

生徒はかなり詳細な部分まで話すので、どの先生がどのような授業を展開しているのか、保健室には「筒抜け」であることがよくわかりました。

とはいえ、話は話。別に、そのことでS先生が教科の先生に改善を求めたり、指導したりすることはありません。しかしそれは、表立っておっしゃらないだけで、教室のありようについてはしっかりと把握されていることがわかりました。

「生徒はここまで授業の様子を克明に観察して、教師の意図もよく見抜いている

のか。授業の欠点も、直接言わないだけで、ちゃんとわかっているのだ」と知ると、「怖いなあ」と思いました。自分自身の授業づくりを振り返らざるを得ませんでした。

生徒のイチオシ授業  
「G先生の数学」

あるとき、校内研修として、同僚同士が授業を互いに参観しあったことがありました。指定された三週間で、教科や学年を問わずなるべく数多く参観し、授業スキルの向上を図るという研修です。

ある日の放課後、保健室でおしゃべりしていた生徒たちから、

「ねえ、先生、今いろんな先生たちが授業中、見に来るよね。なんで？」と尋ねられました。

簡単に研修の趣旨を説明し、「私もいろんな授業を見に行かないといけないんだ。どの授業を参観しようかな。他の教科の先生の授業はあまり見たことがないからな……」

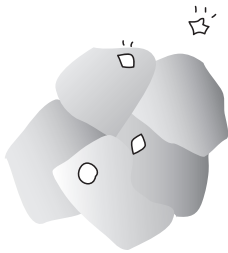
と言いました。

すると、生徒の一人が間髪を入れず、「じゃあ、G先生の数学がいいよ。すぐくわかりやすいよ。G先生の授業は、先生も一度見たほうがいいよ」とまじめな顔をして言うのです。

口頃辛口な生徒が絶賛！

すると、他の数人の生徒たちも、口々に、

「ああ、G先生の授業いいよね。数学わかるようになるもん。私いつも補習に引っかかるけど、G先生の数学補習はめちゃめちゃよかった！ 次のテストですごく点数上がったんだよ」



「私も！ テストの点が上がったから、次の指名補習からはずれたんだけど、あれなら補習続けたいよ。お母さんも『続けて補習授業に入れてもらったら』って言うてる。ほんとにわかりやすいよね」

G先生の数学はわかりやすいと以前から聞いていました。でも、日頃かなり辛い口な生徒たちがここまで絶賛するとは、いったいどんな授業なのでしょう。これはぜひ参観しなくては、と思いました。

## G先生は集団指導と個別対応の達人！

G先生の授業は、集団指導と個別対応が絶妙に組み合わせられて、ときに同時進行で展開していました。また、理解が進んでいる生徒が、苦戦する生徒を応援する仕組みも用意されていました。

当時はアクティブ・ラーニングという言葉はありませんでしたが、今ならそのような用語で表現される要素に満ちた授業でした。

おおらかなG先生の個性を一番感じたのは、数学が得意な生徒はもちろん、苦

手な生徒も遠慮せず率直に疑問を表現しあえる教室の「空気」でした。

こんな数学の授業だったら私も数学が好きになっていたかもしれないと、生徒がうらやましくなりました。

## わかりやすい授業が一番の支援

そんなわけで、保健室で辛口発言をしていた生徒の「授業評価の実力」は確かだったと納得した私ですが、G先生のよいうな達人授業はなかなか真似できるものではありません。

教科も異なるということで、私は私なりに自分の個性を活かした授業を工夫しなければと思って、今に至ります。

駆け出し時代に、大切なことを教えてくれた保健室の生徒たちには、今さらながら感謝の気持ちがいってきます。

当時、学校内に相談室をつくろうと頑張っていた時期で、私はあちらこちらの研修に参加するなど、新しい学びに熱中していました。しかし、この出来事は、「生徒にとって一番役立つ援助とは何か」

と立ち止まって考えるきっかけになりました。

そして、「教科を担当する私たちは、まずは自分の教科を上手に、わかりやすく、おもしろく教えられるようになることが、実は一番の支援なのかもしれない」と考えるようになりました。

## G先生大いに照れる

さて、授業参観の後、G先生にお礼とともに、「保健室で生徒が数学の授業や補習をこんなふうに絶賛していました」と生徒の言葉を再現して聞かされました。

「成績が振るわなくて、だからこそ授業の良し悪しに厳しい生徒たちが『G先生の数学はわかる』って口をそろえて明言していました。先生の授業はホンモノですね。すごいです」と言いました。

すると、

「え〜？ なに、そんなこと生徒が保健室で言ってるの？ なんか、恥ずかしいな〜」

と、しきりに照れるG先生でした。